

# 視点表現の日仏比較

## — 川端「雪国」を通して —

鶴見 千津子

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

### はじめに

日本語学習者の学習が進むにつれ、わかり易い日本語が話せるようになったり、表現が豊かになったりする。しかし、よく観察してみると、文法的な誤りがないにもかかわらず、聞いていてどこか不自然な感じを受けることがある。

また学習者の発話を観察すると、短い会話では流暢であるが、状況の説明や自分の意見や考えなど、まとまった言語活動となると、発話スタイルが変わり、それとともに聞き手にわかりにくくなることもある。

以下は、ある日本語学校で行った授業の一部である。せりふはないが、ストーリーのある組み絵のナレーションを実施した際の、ある学生の発話の一部を文字化したものである。(言いよどみなどは除く。)

①猫がおじいさんのそばに②寄ってきた。③猫は暖くなるために、おじいさんの膝の中に入ろうとする。それで気づいた④おじいさんは、「ミーが私の膝に乗ってくるほど、寒くなったか」と言ってかわいがっ⑤てもらおう。一方、これを見ている犬が「いいん、猫君おじいさんの膝の中まで入って」たぶん犬はこう⑥思うはずだ。(略)おばあさんは、昔はいた古いスカートを探し⑦犬にそのスカートを敷く⑧ようにしながら、・・・・

以上の発話記録から観察されることは次のとおりである。

- 1) ①④⑤⑥に見られるように、話者の視点が猫→おじいさん→猫→話者と頻繁に移動する。
- 2) ②③で見られるのは、ダイクシス表現「～てきた」で話者の視点が、主題の視点に近づいてきて主題省略が行われるはずが、③で再び主題化している。
- 3) ⑧では、やる／あげる表現を使用せず、単におばあさんの行為を事実として述べたために、感情が伝わってこない。

上記の例は、主題の省略、主語の選択など、不自然な表現が見られる。

本稿では、文章のわかりにくさ・不自然さの原因の一つである視点表現からの考察を試みる。久野(1978)の視点の理論を基に、日本語で書かれた小説とその仏訳の中から視点ハイアラキーが関係している文を選び出し、日本語の視点ハイアラキーとフランス語の視点ハイアラキーを主語の選択の点から比較を試みる。

### 1-1. 視点の定義

言語における視点に関しては、久野(1978)が、談話法規則の研究の一つとして扱っている。その中で、日本語の受け身文、授与動詞、相互動詞などの分析を通して、話し手の視点についての理論を提唱し、話し手が談話の中のどの人物に共感するかに注目した。そして、「表層構造の視点のハイアラキー」の序列を仮定した。また、神尾(1985)は、久野の視点に関する理論が、単一文についてのみならず、談話の流れの中においても成立することは明らかであるとした。視点の一貫性という性質は、談話が保たなければならない重要な法則であると述べている。また、久野は話者の視点が主題の視点に近づけば近づくほど、主題が省略し易くなる、という傾向を認めた。認知という面から、宮崎・上野(1985)は、視点情報を含んだ見えの生成が、他者の深い理解を可能にする、と述べている。すなわち、自己の見えと他者の見えとを近づけることにより、同じ「話の世界」を構築する。尚、「視点」という用語は、「立場」(Pichert & Anderson, 1977; 久野, 1981)「既有知識」(内田, 1981)という意味にも使われているが、ここでは次の久野の定義に従う。

### 1-2. 久野(1978)の視点論

久野(1978)は視点という概念を導入して、授受表現などに見られる日本語特有の言語現象を説明している。視点というのは、ある出来事を描写する場合、話し手がどこにカメラを置いてその事実をとらえているかということである。このカメラ・アングルを一次元的に表す一つの手段として「共感度」という概念を用い、それを次のように定義している。

#### 1) 共感度

文中の名詞句のX指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感(empathy)と呼びその度合い、すなわち共感度をE(x)で表す。共感度は、値0(客観描写)から値1(完全な同一視)までの連続体である。次の文章は、夏目漱石「三四郎」からの引用である。

例：うとうとして眼がさめると女は何時の間にか、隣の爺さんと話しを始めている。この爺さんは確かに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、馳せ込んで来て、いきなり肌を抜いだと思ったら背中にお灸の痕が一杯あったので、三四郎の記憶に残っている。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣に腰を懸けたまでよく注意して見ていた位である。

上記の文では、作者は三四郎の立場にたって見たことを描写している。したがって、共感度  $E(三四郎) = 1$  の文である。このような不等式を話し手のXに対する「視点」と呼ぶ。そして、「単一の文は、単一のカメラ・アングルしか持ちえない」という原則を、次のように定義している。

## 2) 視点の一貫性

単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない。

視点の一貫性は単一文だけではなく、複文にも適用される。

「やる」「くれる」動詞の使い分けの分析は、一般に、話し手と、与える人と、受け取る人との人間関係（特に近親関係）に基づいて行われてきたが、視点の問題としてとらえてみると、次のように書き換えられる。

## 3) 授与動詞の視点制約

くれる  $E(\text{与格目的語}) > E(\text{主語})$

やる  $E(\text{主語}) > E(\text{与格目的語})$

「くれる」は、話し手の視点が、主語（与える人）よりも与格目的語（受け取る人）寄りの時にのみ用いられる。一方、「やる」は、話し手の視点が主語寄りか、中立の時にのみ用いられる。

その他の視点関係の一般原理としては、以下のものがある。

## 4) 発話当事者の視点ハイアラーキー

話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない。

例：その時、太郎が僕に殴られた。  $1 = E(\text{一人称}) > E(\text{二・三人称})$

この文の不自然さを上記の規則にあてはめて説明する。「受け身文のカメラ・アングル」は話し手の視点が主語より  $E(\text{太郎}) > E[\text{僕}]$  であることを要求する。他方、「発話当事者の視点ハイアラーキー」は視点が話し手寄り  $E(\text{僕}) > E(\text{太郎})$  であることを要求する。したがって、上記の文が不適格であるのは、この二つの視点が論理的に矛盾しているからだと考えられる。

久野は、この「発話当事者の視点ハイアラーキー」について、話し手は、自分の目にカメラを置いて文を作り出さなければいけないと述べており、全く当然の制約であることから、その汎言語性はかなり強いものであると予想されると述べている。

5) 表層構造の視点ハイアラーキー

一般的に言って、話し手は主語寄りの視点をとることが一番容易である。目的語寄りの視点をとることは、主語寄りの視点を取るのより困難である。受け身文の旧主語（対応する能動文の主語）寄りの視点を取るのは、最も困難である。

すなわち、不等式で示すと  $E(\text{主語}) > E(\text{目的語}) > E(\text{受け身文の旧主語})$

6) 談話主題の視点ハイアラーキー

談話に既に登場している人物に視点を近づける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である。

$E(\text{談話主題}) > E(\text{新登場人物})$

このハイアラーキーで特に注意すべきこと（6）が禁止していることは、

$E(\text{新登場人物}) > E(\text{談話主題})$  の関係だけである。すなわち、 $E(\text{新登場人物}) = 0$  の視点は保てる。これは、次の例文で示される。

例：太郎は最近景気がいい。誰かが（太郎に）お金をやったに違いない。

この文は、太郎を遠くから眺めている文である。

7) 談話法規則違反のペナルティー

談話法規則に意図的に違反した時には、特殊な文（多くの場合、不適格文）が生じるが、非意図的に違反した場合には、そのようなペナルティーがない。

冒頭で日本語学習者が作った文の中で、⑤「～と言ってかわいがってもらおう。」という文を呈示したが、この文の不自然さは、4)と5)の視点ハイアラーキーの矛盾に原因がある。4)の要求する視点ハイアラーキーは、 $E(\text{おじいさん}) > E(\text{猫})$  であるが、5)の要求する視点ハイアラーキーは、 $E(\text{猫}) > E(\text{おじいさん})$  であるところから、矛盾するのである。

視点について、日本語と英語を比較した大塚（1988）によると、日本語では、発話当事者からの視点というものが自明のこととして設定されており、それに合うように表層構造の視点ハイアラーキーが働き、逆に、英語では表層構造の視点ハイアラーキーよりも発話当事者の視点ハイアラーキーの方が、より重要な働きをしているように思われると述べている。

そこで、久野（1978）の視点の理論を基に、日本語とフランス語における主語の選択の相違について考察する。

## 2. 視点表現の日仏比較

### 2-1. 方法

テキストとして、川端康成の『雪国』を取り上げ、フランス語版と比較する。調査の対象としては、日本語版、フランス語版ともに1.4)～6)の視点ハイアラーキーが関係している文、または句である。つまり、主語の位置に現れている名詞句、および目的語の位置に現れている名詞句が人を表す名詞句である文、または句である。省略については、久野(1978)の省略の原則(省略されるべき要素は、言語的、あるいは非言語的文脈から、復元可能でなければならない)により、省略されている名詞句は補って考える。日本語では主語の位置、および目的語の位置の名詞句が人を表す名詞句であっても、フランス語ではまったく異なった表現形式がとられ、主語の位置の名詞句か目的語の位置の名詞句のどちらかが人を表す名詞句ではない場合、あるいはどちらも人を表す名詞句ではない場合には調査に含めない。また、扱う文は平叙文のみとする。

### 2-2. 結果

1) 同一の視点ハイアラーキーを示すものの例をあげる。

- (1) a : 山から降りてきて君を初めてみたもんだから、(pp.26)  
b : Comme je vous avais vue, vous, quand j'arrivais à peine de mon séjour en haute montagne.
- (2) a : 髪を洗うのは止めにして、島村を裏庭へ誘い出した。(pp.96)  
b : Prenant le bras de Shimamura, elle l'entraîna vers le jardin de derrière, non sans reprendre au passage ses sandales et ses tabi détrempés,

(1) は日本語、フランス語ともに主語の位置にある名詞句は「私(島村)」であり、目的語の位置にあるものは、「君(駒子)」である。(2) でもともに、主語の位置にあるのは、「駒子」であり、目的語の位置にあるのは、「島村」である。

2) 次に日本語とフランス語で異なった視点ハイアラーキーを示す例をあげる。

まず、日本語では受け身文が使われているが、フランス語では能動文が使われている例を挙げる。

- (3) a : 三味線と踊りの師匠の家にいる娘は芸者というわけではないが、大きい宴会などには時たま頼まれて行くこともある、半玉がなく、立って踊りたがらない年増が多いから、娘は重宝がられている。(pp.16)  
b : On la sollicitait parfois et elle ne refusait pas son concours. Et c'est pourquoi on appréciait beaucoup sa participation.
- (4) a : 一時間程して女が女中に連れられてくると、島村はおやと居ずまいを直した。(pp.16)  
b : la servant revint et introduisit [la demoiselle qui loge chez la maîtresse de musique.]

- (5) a : 日本踊りの若手からも誘いをかけられた時に、彼はふいと西洋舞踊に鞍替えしてしまった。(pp.21)  
b : ainsi que l'en priaient avec insistance les plus jeunes notabilités du mode de la danse, quand brusquement son intérêt s'en détournait, pour se fixer tout entier sur le ballet occidental.

次に、日本語もフランス語も能動文が使われている例をあげる。

- (6) a : 君は口説かないんだ。(pp.51)  
b : c'est pur que nous puissions parler ensemble que je ne vous touche pas.

また、日本語もフランス語も共に受け身文であるものが2例あった。

- (7) a : その後の宴会に呼ばれたと言った。(pp.51)  
b : elle était invitée à la soirée qui devait suivre,  
(8) a : 駒子も客に連れられて別の宿の二次会へ廻ったのかと思っていると、(pp.111)  
b : Komako avait dû être entraînée par quelque invité à une autre soirée,

さらに、主語の位置に現れている名詞句と目的語の位置に現れている名詞句とが日本語とフランス語では全く逆になっているものの例を一つあげる。

- (9) a : いや、廊下で人に会うから。(pp.54)  
b : Pas moi: quelqu'un pourrait me voir dans l'entrée

(9a) で、省略されている主語の名詞句は「私」であり、一方、(9b) では、目的語の位置に「私」がある。

- (10) a : 泣いたわ。言われて泣いたこと、私忘れないから。(pp.141)  
b : Cela m'a fait pleurer. Je n'oublierai jamais que vous m'avez fait pleurer.

- (11) a : 番頭さんに見つかってしかられた。(pp.111)  
b : Mais le portier m'a vue. C'est égal, et je me moque bien si le parquet craque! Ils peuvent ronchonner autant qu'ils voudront.

(9a / 10a / 11a) では、発話当事者の視点ハイアラーキーと表層構造の視点ハイアラーキーは守られている。しかし、(9b / 10b / 11b) では、両者に矛盾がある。しかし、これらは意図的な違反ではないので、適格文になるのである。

3) 次に態に関して、日本語とフランス語を比較する。

まず、フランス語の態には、日本語とも英語とも異なる特徴がある。それは、「受動態の主語になりうるものは、能動態の直接補語のみである」という規則である。この点、英語が間接補語をも主語にできるのとははっきり異なる。たとえば、「Le directeur donne le prix à cet élève.

校長はその生徒に賞品を与える」という能動態を受動態に変える時に、直接補語の *le prix* を主語として「*Le prix est donné à cet élève par le directeur.* 賞品は校長によってその生徒に与えられる」という構文のみが可能であって、間接補語の *à cet élève* を主語にして「*Cet élève est donné*」と書くことはできない。

本文中の例をあげる。

(12) a : 栗をぶつつけられても、腹をたてる風がないので、(pp.98)

b : *Lui-même n'avait eu aucun mouvement d'irritation, même sous le fer de salve des châtaignes.*

間接補語の「島村」は主語になれないので、「ぶつつける」という動詞が現れていない。

4) 日本語には、主語、あるいは目的語寄りの視点を要求する動詞が多数ある。

たとえば、 貰う 主語 > 非主語          よこす 与格目的語 > 主語  
聞く 主語 > 「カラ」句

久野(1978)では、上記の3つの動詞の中で、「よこす」の視点性が極めて強く、「貰う」のそれは中間で、「聞く」の視点性は極めて弱いことがわかる、としている。「よこす」の例が本文中に6例あった。

(13) a : 港へ帰ったんなら、そうと手紙をよこせばいいじゃないか。(pp.88)

b : *Puisque tu te trouvais sur la côte, pourquoi ne m'avoir pas envoyé une lettre.*

(14) a : 師匠がこの村へ来るついでに預けてよこしたのだと言う。(pp.88)

b : *Aussi avait-il envoyé Komako avec la maîtresse de musique, quand celle-ci avait décidé de revenir dans ces montagnes.*

(15) a : 駒ちゃんがこれよこしました。(pp.111)

b : *Komako me prie de vous remettre ceci.*

(16) a : だから、これ持ってらっしゃって、書いてよこしたんだわ。(pp.111)

b : *C'est aussi pourquoi je l'ai expédiée avec ce bout de billet chez vous.*

以上のように、「よこす」は目的語寄りの視点を強く要求する。フランス語で、*envoyer* / *remettre* / *expédier* で表されている。

5) 次に挙げた例は、日本語の特徴である補助動詞を用いて、目的語寄りの視点を明示したものである。

(17) a : 君が送りに来てくれた間に。(pp.83)

b : *Pendant que tu étais avec moi.*

(18) a : うちの人はずいぶん大事にしてくれるのよ。(pp.83)

b : *Mais ils sont d'une gentillesse extrême avec moi, vous savez.*

(19) a : 帰りがおそいと敷いといてくれるのよ。(pp.83)

b : Tout a été préparé pour moi quand je rentre tard;

フランス語では、avec / pour を用いて、目的語寄りの視点を明示しているのがわかる。

上記の例は、いずれの場合も日本語では、目的語を示す名詞句「私」が省略されているが、フランス語では「me」で明示されている。日本語の省略の規則が働き、十分復元可能な例である。

6) 久野は補助動詞としての「てくれる・てやる」の視点制約は、独立動詞としての「くれる・やる」と極めて類似しているが、ただ一つ重要な点で相違している、と述べている。それは「てやる」は、中立的な視点（主語＝非主語）では、使用できないということである。以下にその例を挙げる。

(20) a : ほんの子供ですから、駅長さんからよく教えてやっていただいて、よろしくお願ひいたしますわ。(pp.5)

b : Je voudrais vous remercier de vous en être occupé.

(21) a : 駅長さん、弟をよくみてやって、お願ひです。(pp.6)

b : Est-ce que je peux compter sur vous pour lui apprendre le nécessaire.

(22) a : 帰るなら送ってやるよ。(pp.29)

b : Je vous ramènerai, s'il faut absolument que vous partiez.

(23) a : 着物を脱がせたり、洗ってやったりするのが、いかにも親切なものいいで、(pp.116)

b : elle parlait à la petite fille pour la déshabiller et lui donner son bain.

以上のように、「てやる」は、主語寄りの視点を要求する補助動詞である。その理由を久野は以下のように説明する。

主語寄りの視点「買ってやる」          中立の視点「買う」

主語寄りの視点「やる」                  中立の視点「x」

すなわち、主語寄りの視点「買ってやる」に対して、中立的視点を表すためには、「買う」という形式があるので、ここで「買ってやる」に、中立的視点を表させる必要はない。他方、主語寄りの視点を表す独立動詞「やる」に対して、中立的視点を表すためには、「買ってやる」の場合と異なり、「やる」を省略することはできない。他に中立的視点の「与える」行為を表す表現がないので、「やる」が「x」の穴埋めの機能も兼ねているものと考えられる。

以上述べてきたように、受け身文が主語寄りの視点を要求するのは、これらの動詞がともに主語寄りの視点を要求するのと類似している。受け身文では、わざわざ行為主体を主語の位置から外し、行為対象を主語の位置に据えるのであるから、話し手が、この構文パターンを用いる時は、



何か特別な理由、すなわち、行為対象に対する視点的接近がなければならない。

### 3. 考察

1-2.5) の表層構造のハイアラキーからみると、受け身文と能動文は全く異なった視点を持つ文である。日本語では (9a) のように、表層構造の視点ハイアラキーと発話当事者の視点ハイアラキーの両者が守られるように働く。そして、発話当事者の視点ハイアラキーのために、(13) から (19) のように、目的語寄りの視点をとる時は、それを明示しなければならない。フランス語の場合、統語的に文は主語を持たなければならないので、表層構造の視点ハイアラキーが効力をなくし、目的語寄りの視点であっても、それを明示する必要がない。したがって、両者の視点ハイアラキーに矛盾があっても、意図的な違反ではないので、適格文がうまれる。

日本語とフランス語との違いは、この表層構造の視点ハイアラキーと発話当事者の視点ハイアラキーがその重要さにおいて、逆に働くのではないだろうか。つまり、日本語では、発話当事者からの視点が自明のこととして決まっており、逆にフランス語では、発話当事者の視点ハイアラキーの方が、より重要だと考えられるからだと考察できる。

### 4. 日本語教育への提言

本稿では、視点の理論を基に主語の選択について受け身文を中心に考察した。事実をどのカメラ・アングルでとらえるかによって、表現の文の形が異なってくる。これはどの言語にも言えることではあるが、それぞれの言語の持つ特質によって、わずかな違いがでてくるのである。そこに日本語の受け身文が日本語を外国語として学ぶ学習者には、学習しにくい項目の一つになる理由なのだろう。

福田 (1990) は、日本人小学生を被験者にして、「視点操作能力と文章理解」の実験を行った。その結果、「視点操作能力が高い人は、低い人よりも文章をより良く理解する」という仮説が小学校5年生で支持されたとしている。

また金谷 (2010) では、『雪国』を日本語と英語で比較した結果、「英語と日本語の認知的な差・発想の違い」(pp.28) を分析し、それが「視点の違い」(pp.28) であることを明らかにしている。

日本語学習者が日本語の視点を習得することが、わかり易い日本語文章を作成する一つのアプローチであると思われる。それは、単に受け身文で説明される被害を受けているか否かという意味的なアプローチだけではなく、どの名詞句を主語に選ぶかという観点を指導する必要があるのではないかとと思われる。

『引用文献』

- 朝倉季雄 (1995) 『フランス文法事典』 白水社
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 上/下』 大修館書店
- 内田伸子 (1981) 「物語構成と理解における目標構造の役割」 『日本心理学会第45回大会発表論文集』
- 大塚容子 (1988) 『視点による日英比較』 日本語教育 67号 pp.173-180
- 神尾昭雄 (1985) 「談話における視点」 『日本語学』 vol.11 明治書院
- 金水 敏 (1992) 「場面と視点—受け身文を中心に—」 『日本語学』 vol.11 明治書院
- 金谷武洋 (2010) 『日本語は敬語があつて主語がない』 光文社新書
- 久野あきら (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 小林 正 『フランス語便覧』 評論社
- 鈴木清一 (1992) 「視点の心理」 『日本語学』 vol.11 明治書院
- 田窪行則 (1997) 「視点と言語行動」 くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版
- 福田由紀 (1990) 『明示的視点表現を含む物語の理解と視点操作能力との関係』  
Japanese Journal of Educational Psychology, 1990.38, pp.173 - 180
- 益岡隆志 (1992) 「表現の主観性と視点」 『日本語学』 vol.11 明治書院
- 松木正恵 (1992) 「『見ること』と文法研究」 『日本語学』 vol.11 明治書院
- 益岡・田窪 (1991) 『基礎日本語文法』 くろしお出版
- 宮崎清孝・上野直樹 (1985) 『視点』 東京大学出版会 認知科学選書
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点』 創拓社
- 森田良行 (2006) 『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話ことばの文法』 くろしお出版
- 山田 純 (1985) 「文における視点」 『日本語学』 12月号 明治書院
- Guillemin・Flescher, Jacqueline 1981 Syntaxe Comparée du Français et de l'Anglais: Problèmes de Traduction, Edition OPHRYS
- Pichert, J. W. and Anderson, R. C. (1977) 「Taking different perspectives on a story」 『Journal of Educational Psychology, 69』 pp.309-315